

第四十章 決 断

五月十一日午後五時半、長途の旅程を終えて羽田空港から私邸に帰りついた大平首相の顔には、さすがに疲労の色がにじみ出ていた。三月下旬からの重なる内政外交問題の処理、困難をきわめた国会運営、さらには、土曜、日曜返上の政経文化パーティーへの出席、そしてこれに続く十二日間、五万キロを超える首脳外交の旅、それはいかに頑健を誇る大平首相といえども、七十歳の肉体には限界に近い負担であった。

だが、それでもなお、首相には休息のゆとりがなかった。その夜、瀬田の私邸で大平首相を待ちかまえていた校内幹事長、伊東官房長官、田中副幹事長と、会期末まで一週間を残すだけとなった終盤国会の情勢検討と重要法案処理の協議を行わなければならなかったのである。すでに首相外遊中の五月八日、自民、社会、公明、民社四党の国会対策委員長会談では、話合いの結果、『四党が一致して賛成する法案以外は廃案とする』という合意ができていた。この合意に従うと第二次大平内閣の重要法案である政治資金規制法案や公職選挙法の改正案、地方支分部局整理法案などが軒なみ廃案の憂き目にあうことになる。与野党の伯仲、非主流派の非協力というハンデを背負つての国会対策とはいえ、そのような安易な妥協で重要法案を流されたのでは、これまで汗水流して苦労してきた甲斐がないと、帰国したばかりの大平首相は国会対策関係者の法案取扱いに強い不満を洩らし、最後までその成立のため努力することを求めた。

しかし、現実の問題としては、五月十八日の会期末までに一週間しかなく、その間に野党が不信任案を提出して参議院選挙前の氣勢をあげようとする動きが確実であると見られた。こういう状況下で、与野党が対立する重要法案を成立させ

ることは至難の業である。そこで政府側は、十一日夜の協議を受け、十二日昼には政府・与党首脳会議を開いて、法案処理についての要請を行ったが、党側はこれを満足させるような反応を示さなかった。十三日の午後からの衆議院の本会議では、会期を九日間延長して五月二十七日までとすることが決議された。こうして終盤国会は、参議院選挙が公示される三十日の直前まで行われることとなったが、実質的には参議院選挙に向けて各党とも走り出しており、どこまで成果があげられるかは疑問であった。

一方、野党側は、参議院選挙を間近に控え、氣勢をあげるための大平内閣不信任案の提出問題をめぐって微妙な駆け引きを続けていた。社会党とすれば、不信任案の提出にできるだけ多くの野党の同調を取りつけ、共同提案とする形を取りたかったが、公明、民社両党は不信任案提出にためらいがあった。とりわけ、民社党は、不信任案提出が一部自民党内主流派の欠席戦術、不信任案成立、衆議院解散という不測の事態を招きかねないことを懸念していた。しかし、社会党は十三日、公民両党が共同提案に加わらない場合でも、その週のうちに単独で不信任案を提案する方針を決めた。

これを受けて開かれた翌十四日の社公民三党の党首会談では、公明党は、内閣不信任案の提出には賛成するものの、共同提案に加わるかどうかの態度は保留し、民社党は、内閣不信任案の提出そのものに難色を示し、改めて中央執行委員会を開いて対応策を協議することとした。それにしても、民社党の対応はこれまでになく慎重だった。背景には自民党反主流派と直結した情報をもとに、「不信任案が出されれば解散、同日選挙になる」との読みがあったと察せられる。

この頃、事あることに反大平の運動を展開してきた自民党刷新連盟（略称「刷新連」）の動きも慌しくなってきた。刷新連は、反主流派の最強硬論者である赤城崇徳、藤井勝志（以上三木派）、福家俊一、中野四郎（以上福田派）、稲葉修、中尾栄一（以上中曾根派）に、長谷川峻、石原慎太郎らの中川グループが、ラスベガスで大がかりな賭博をしたことが明るみに出された浜田幸一の事件を契機として、政界に波及が噂されるKDD事件など一連の不祥事を解明し、党の刷新を図るということを名目に四月二日に結成したのだが、その真の狙いは、福田、三木、中曾根、中川派の本隊を巻き込んで大平打倒勢力を盛りあげることにあった。

社会党の不信任案の提出は、十六日と決まった。その前夜、民社党は中央執行委員会を開き、不信任案への対応を協議した。この時の経緯を佐々木委員長はのちに次のように語っている。

「われわれとしては、野党の提出した不信任案に反対するわけにも行かない。と言って自民党反主流派から何人欠席者が出るかわからないのに、こちらが欠席するわけにもいかない。結局筋論として社会党の不信任案に条件つきで賛成することに決まったわけですが、あの時の議論はほんとうに深刻でした。」

十六日午前十時、自民党は、党本部のホールで両院議員総会を開き、かねて検討してきた党倫理憲章案を承認するほか、党紀委員会を改組するための党則改正委員会を設けることを決める方針であった。ところが、定刻の十時になっても反主流派議員の出席が悪く、党大会に代わる両院議員総会の定足数を満たすには足りず、結局、通常の両院議員総会として開会された。この総会で、大平首相は「党の倫理の確立が党再生の急務である」ことを訴えた。倫理憲章案は満場一致で承認され、全党結束して野党の不信任案を否決し、参議院選挙に臨むことが決議された。だが、この時の反主流派議員の大量欠席は、これから起きる出来事の不気味な前触れだったのである。

同日十時三十九分、社会党は、大平内閣が、福祉、物価など国民の暮しに背を向け、内政をないがしろにした、浜田幸一議員の賭博事件など汚職かくしに終始した、対米追従で平和外交の推進を怠った、等の理由で内閣不信任決議案を提出する手続きを取り、この決議案はこの日午後の衆議院本会議で緊急上程され、票決が行われることになった。

他方、この頃までに、刷新連の中でも不信任案提出が出たら同調するという強硬論は急速に退潮に向かっていた。中には、各実力者を巻きこんで「公党を覚悟で行動を」と主張するものもあったが、そこまでの見通しや準備もないように見えた。自民党国対筋も十票以上の差で不信任案は否決と読んでいた。

大平首相は、両院議員総会から首相官邸に戻った。この時までには、社会党の不信任案提出の手続きが済み、民社党の最終態度も決まって、全野党が不信任案支持に足並みを揃えていた。総理番の記者からこの事態に関する感想を聞かれた大平首相は、「(執行部が)いろいろやってくれている。(だから)粉碎できるのではないか」と否決に自信のあるところを

示し、この日の夕刊各紙も「党内反主流派にも野党に同調する動きはなく、夕刻までには否決される」といつ見通しを報じている。

不信任案の本会議緊急上程が決まると、党内反主流派の動きは活発化した。福田派は、十二時から世話人会を開いて「不信任案問題に対する判断を福田前首相に一任する」ことを決めた。三木派も、同じく十二時から緊急総会を開き、不信任案に対する態度を保留と決定した。だが、中曽根派は午後二時四十五分から緊急総会を開き、その席で中曽根元幹事長が「一糸乱れず結束して野党と対決する」と強調、不信任案否決の態度を決めた。

午後一時、衆議院の議院運営委員会では、不信任案を緊急上程する本会議の開会を午後三時半と決めた。一方、前夜から大平首相に会いたいと申し入れていた刷新連は、十六日の午前になって党執行部を通じて、再度、会見の申入れを行った。桜内幹事長は「今更会つても仕方がない」と判断し、田中副幹事長が大平首相の意向を確かめた上、会見に応じない旨答えた。だが、刷新連は、「二人か三人で締めくくりとして会いたい」と強く再考を求めた。大平周辺はこれを大平首相が誠意をもって答えてくれれば、それをもって銚をおさめる」という感触で受けとめた。また、亀岡高夫議院運営委員長や伊東官房長官から「むしろ会つた方がすっきりしてよい」との進言があり、院内の会談がセットされた。

来日中のカミセセ・マラ・フィジー首相との宮中午餐会を終えた大平首相は、その足で院内の総理大臣室に入り、二時五十分から、閣僚応接室で刷新連の代表と会見した。刷新連側からは、赤城崇徳、田中伊三次、長谷川峻、福家俊一、中尾栄一らが出席し、党側からは、桜内幹事長、田中六助副幹事長らが同席した。刷新連の申入れは、浜田幸一を国会に証人喚問する、KDD問題を説明するため、国会に綱紀肅正委員会を設置する、十三日放映されたテレビで、田中六助副幹事長が刷新連は売名行為だと発言したことの取消しを求める、の三点であり、これについて、早急に首相の回答を求めた。これまでの立場に沿って理解を求めようとする大平首相に対して、刷新連側は、「党改革と綱紀肅正に首相は熱意が足りない」と責め、「リーダーシップを発揮して、党のウミを出すべきである」と主張した。

その間、田沢国会対策副委員長と石井一議院運営委員会理事がその場に入り、本会議開催について、「野党は一時間以上

は待てないと言っている」と報告したが、険悪な空気に、二人は「とにかく待つてもらいましょう」と部屋を出た。部屋の雰囲気はさらに悪化し、罵り合う場面さえあった。エスカレートした刷新連側は、「本会議をやるというならとめない。そのかわり、われわれは入らない」と圧力をかけた。

終始落ち着いて応対していた大平首相は、「それでは、党執行部と相談して、ご返事しよう。どなたにご連絡を」と問いかけた。刷新連側の田中伊三次は、「みんな待っているのです、すぐ、返事をくれますね。連絡は、中尾栄一君に」と言って引き揚げた。直ちに、西村副総裁、鈴木総務会長、安倍政調会長、金丸国対委員長が呼ばれ、大平首相を中心に、前から入っていた桜内幹事長、田中副幹事長を交えて協議が行われた。「おどかしてますね」、「どうして、こんなことになったのかなあ」などのつぶやきが聞かれたという。

その時、石井理事が再度、本会議開催について連絡に現れ、「野党は、四時半が限度だと言っていますが」とたずねた。幹事長らが、「五時にしてもらえ」とさらに三十分の延長を指示した。これを受けて、石井理事が「総理、五時でいいですね。もう延期はありません」と念を押すと、大平首相は、「それでよろしい」と言った。

回答は、間もなく大平首相自らペンを取って書きあげられた。

「一、浜田喚問については、国会の国政調査権の行使に十分留意の上、航特委において国会の権威にふさわしい結論を出すよう、総裁は執行部に指示する。二、国会に綱紀肅正委員会を設ける件については、執行部に検討するよう指示する。三、田中六助自民党筆頭副幹事長発言については、事実調査の上、指摘の事実があれば、取り消しさせるようにする」という内容である。

桜内幹事長が閣僚応接室の中から電話で、メモを読みあげる形で、刷新連側にこの回答を伝えた。先方がその真偽をいぶかったためか、幹事長は、「今、われわれがここで総裁の指示を受けたんです」と繰り返した。本会議が開かれるまでの間を、閣僚応接室ですこす大平首相は、誰に言うことなく、「私の不徳のいたすところで、諸君に大変迷惑をかけるなあ」と二度ほどつぶやいた。

しばらくたって、刷新連が総理の回答が来ないと騒いでいるという情報が入った。桜内幹事長が大平首相の回答を電話で伝えてから三十分近くの時間が経過していた。桜内らが重ねて刷新連の幹部たちに電話で連絡を取ったが、その過程で、反主流派の議員が足止めの状態になって第一議員会館の会議室やその付近に集まっていることがわかった。

午後四時二十分、福田、三木、中曽根、中川の四者会談が始まり、刷新連のメンバーも同席した。

時間はまたたく間に経過して行く。大平首相や西村副総裁、桜内幹事長、安倍政調会長ら党幹部はひきつづき院内総理大臣室で待機していたが、刷新連からは何の音沙汰もない。いよいよ時間が迫って、午後四時五十一分、大平首相は自民党代議士会に顔を出し、本会議場に向かった。予定通り五時前に衆議院本会議の開会を告げる予鈴が鳴らされた。五時に本会議が開会することは、先に桜内幹事長から刷新連の田中伊三次に伝えられ、刷新連もこれを確認していた。

そして、時間どおり本会議が開会された。しかし、反主流三派の議席はほとんど空席であった。社会党の飛鳥田委員長の内閣不信任決議案の趣旨説明に対して、まず自民党の大野明議員が反対討論を、続いて各野党がそれぞれ賛成討論を行うという段取りである。この討論の間に議席に入れば採決に間にあう。大平周辺はそうなるだろうという見方をしていた。

だが、この頃、反主流派三実力者と党刷新連盟の会談に出席していた森下元晴（中曽根派）が、灘尾衆議院議長に「本会議の開会繰下げ」を求めていた。灘尾は「採決まで一時間ぐらいあるからその間に考えて出てほしい」と言い、これを拒否した。間もなく中曽根元幹事長自身が、第一議員会館の刷新連の事務所から電話で桜内幹事長を呼び出し、「三木、福田両氏を説得する時間があるので、しばらく休憩にできないか」と言ってきた。この本会議休憩の要請は、すでに金丸国会対策委員長も試みていた。どうも様子がおかしいと判断した金丸は、灘尾衆議院議長に本会議の休憩の可否を打診した。金丸によると、灘尾はこの時、「とんでもない。三時の本会議を五時に延ばしている。国民注視の本会議を自分の都合で勝手に休憩したり、延ばしたりなどできるものではない。国会をそのように軽々しく考えてもらっては困る」と言ったという。桜内は、この直後、本会議場を出て、第一議員会館で協議中の三木、福田、中曽根を訪ねて説得にあたったが、返事は否定的なものだった。

この頃になると本会議場も騒然としてきた。このままでは内閣不信任決議案が成立してしまふ。そうなれば解散が総辞職は必至である。本会議場から廊下に出てきた民社党の春日常任顧問は、「だから言わないことじゃない。切れないノコギリを自分の腹にあてやがった」とつぶやいたという。

議場内では壇上の討論をそっちのけにして各党の首脳が三々五々集まって協議している。五時五十二分、加藤官房副長官が「このまま本会議を続行すべきか否か」と議場から雑壇の伊東官房長官にメモを渡した。伊東は大平首相にそのメモを渡した。大平の答は「既定方針通り」であつた。既定方針　すでに三月初旬以来、もしこんな事態になったら「解散」という大平の肚はごく身近のものには知らされていたのである。

六時十分、桜内幹事長は再度刷新連の説得に赴いたが、いまさら応ずる雰囲気ではなく、桜内は「あとは皆さんの判断だ」と言つて二度にわたる説得を断念し、院内に戻つて、「もうだめです。覚悟して入りましょう」と議場に向かつた。桜内は後に、「最後に行ったときには、もうあんまりとんがった雰囲気でなく、福田さんは僕に握手をして、『君、大変だな』とにこにこしながら、『お互いに頑張ろうや』と言つた。私は、これはいよいよもつて悪いと思つた」と語っている。

議場閉鎖四分前に、中曾根と同派の幹部が議場に入つてきた。これと入れ替りに安倍政調会長が森喜朗（福田派）らに抱きかかえられるようにして議場から出た。

午後六時三十五分議場は閉鎖された。採決の結果は、賛成二百四十三、反対百八十七。大平内閣不信任決議案は可決された。昭和二十三年の「なれ合い解散」と昭和二十八年の「バカヤロー解散」に次いで、戦後三回目の不信任案の可決であつた。

その時テレビに大寫しにされた大平首相の表情は、重大な決断を行った責任に耐える厳しさと自己の信念に生きる雄々しさにあふれていた。だが、むろん、自分が総裁をしている政党から欠席者が出て、不信任を食つたということは、たえようのない気持であつたろう。本会議場を出て院内総理大臣室に入つてからも大平首相は一言も発しなかつた。

そこへ福川秘書官が隣の閣議室に閣僚が揃つたことを知らせにきた。

「閣議をお願いします」

「おう」とやつと気がついたように大平は返事をし、

「閣議の準備はどうなっている」

「隣にそろってお待ちしています」

「そうか、それでは……」と言つて大平は立ちあがった。

どこか断絶した孤独の世界から舞い戻ってきたような大平首相であつた。この時、大平首相は生涯で最も大きな試練の波を越えた。

臨時閣議を開く手筈は、すでに本会議中に伊東官房長官、竹下蔵相らの発案で整えられ、各大臣には本会議後直ちに院内大臣室に集まるよう連絡されていた。

午後七時六分、臨時閣議が開かれた。大平首相は、「一生懸命国政のために働いてもらつていたのに、このようなことになつて、残念だ。憲法の規定により、道は解散か、総辞職か二つしか残されていないが、いずれを選択したらよいか、私にまかせていただいてもよし、ここで決めていただいてもよい」と発言した。しばらく静寂の時が流れたが、最長老の倉石法相が口火を切つて、「総理にお任せします」と述べ、これを皮切りに竹下蔵相はじめ各閣僚も、次々と首相に一任した。後藤田自治相は、「解散を前提に総理に一任します」と述べ、武藤農林水産相、地崎運輸相もこれに同調して、解散を進言した。閣議は、政府声明をつくるため一時休憩して、控えていた桜内幹事長ら党執行部と協議したうえ、再開された。大平首相の「解散をいたします」という静かな声に、解散が全員一致で閣議決定され、政府声明を決めて、八時七分、閣議は終わった。これによつて事実上六月二十二日に衆参両院同日選挙を実施する方針が打ち出されたのである。

午後九時五十分、私邸に戻つた大平首相は、総理番記者から、反主流派の対応について尋ねられたが、「どうしてあひうことになつたのか、私にもよく理解できない」と一言答えて、寝室に消えた。

不信任案の可決された翌十七日の新聞は、一斉に、自民党の分裂選挙を報じていた。本会議を欠席した反主流派がどう

動くか、党執行部がどう対応するか、それは、八〇年代の政治体制の進路にかかわるものといっても過言ではなかった。

十七日朝、私邸を出る大平首相は、記者たちに対し、「たいへん国民にご迷惑をかけることになるが、問題をたくさん抱えて、中途半端はいけない。きちんとした姿にして政局に臨み、政策推進にあたり、理解を頂きたい。……」（党内の造反者については）「どういふ事情か、まさかということが起きたので、よくつまびらかにしたい。かつての同志であった方々なので、その処理は、慎重にしなければならないと思うが、党としての筋道もたてねばならない」と語った。

党本部に到着すると、安倍政調会長が待っていた。安倍は辞表を提出したが、大平首相はこれを受け取らず、「政局の安定が第一です。安倍さんは大局の見える人だから、私の決意はわかってもらえると幸いです」と言った。（『回想録』追想編）

その日のうちに、反主流派は、新党は見送るが、独自の選挙のための連絡協議会を発足させることを決めるなど、あわただしい動きが続いた。

十八日の日曜日、大平首相は、終日、自宅で過した。何を思ったか、長女の森田芳子に手伝わせて、本の整理を始めた。自宅に残すものと、郷里香川の小平文庫へ送るものとを黙々として選り分けていた。午後になって、せがまれて、総理番の記者と懇談を行い、不信任案の経過について雑談した後、いわゆる造反組に対して次のように語った。「党紀違反は、たださねばならないが、欠席組もいろんな事情があるのだから、それと計って行かねばならない。政党は、夫婦みたいなもので、こんなことがあっても、どうということでもない。俺だって、鳩山内閣不信任案のときに、保利さんと一緒に欠席した。政党は、分離と独立を繰り返して行くものだ。去年の首班指名のときは、別の名前を書かれたが、今回は欠席だから状況はよくなっている（笑）。諸君は、事実上の分裂選挙と言うが、総裁以下、号令一下、挙党一致で闘ったことなど一度もないよ。」

しかし、大平首相は、当初、欠席組の少なくとも責任ある立場にある人への処分にとだわっていた。十七日夜に訪れた田中副幹事長にも、十八日に来訪した伊東官房長官にも、「少なくとも主だったものだけは、公認は止めるべきだと思っ

と力説した。

解散の手續きは、十九日午後一時二分、灘尾衆議院議長が、各党の代表が起立する中で解散詔書を読みあげるといふ異例の形で行われた。この後、大平首相は記者会見に臨み、何故に解散の途を選んだかを説明した。

「確かに途は解散、総辞職の二つがある。私としては、総辞職する理由はないし、社会党のいう三つの理由には承服できないので、これに対しては政府と国会という立場で原点に帰って国民の判断を仰ぐのが憲法の常道と考え、解散を決意した。総辞職すると、当然野党第一党に政局を任せて、選挙管理内閣を作つてその手で解散となる。そのような手順でやることは、政局の混迷を倍増することになり、そつした道をとるべきではない。何の迷いもなく解散の途を選んだ。……党内にはかねてから抗争があり、それが完全に決着がついていなかったことが今度の解散につながる大きな原因の一つである。これは、党内の問題であつて、解散するかしないかは政府と国会の問題である。党内問題を国会の場を借りてやるというのは、前に先例があつても、繰り返してはならない。……党内の融和を図らねばならないと、党運営には相当周到な配慮を払ってきたつもりだが、一枚岩になれなかつたのは残念だ。私の党運営についての責任は負わねばならない。」

一方、二十日に、安倍晋太郎、河本敏夫を代表世話人として党再生協議会を発足させた反主流派も、いざ選挙となると、本会議欠席への批判が地元で強いことから、造反の意気込みも次第にしほみ、経済界もパレスホテルで経団連の会合を行うなど党一本化への働きかけをみせ、党内は、抗争の沈静化へ向かつて動き始めた。結局、党執行部は、誓約書のしほりを強めることで、欠席議員の公認も認めることとし、二十二日夜には、西村副総裁、桜内幹事長、鈴木総務会長が、党再生協議会の安倍、河本の代表世話人ならびに中川一郎らと協議し、再生協議会は当面活動を停止するなど選挙へ向けて党体制をつくるための和解が成立した。

大平首相自身、二十三日午前、河本、安倍両代表世話人と会い、その合意内容を確認し、その後、自民党全国県連幹事長会議において、党の全面的な刷新を断行、自民党単独政権を維持する決意を述べた。「小魚を煮るほどの細心さと、山をも移すほどの大胆さを兼ねて選挙戦を戦つてほしい」という大平首相の演説に、出席者は熱烈な拍手を送つた。自民党は、

結局、無所属で立候補した田中伊三次のほかは、引退組を除いて、全員公認の手続きがとられたのである。

選挙戦に至る間も、大平首相は、休む暇がなかった。二十四日には、滋賀政経文化パーティー、二十五日には、和歌山政経文化パーティーと続いた。滋賀県では、琵琶湖を周遊水質汚染による赤潮発生の実態を視察した。

二十七日からは、中国の首相としてはじめて日本の土を踏む華国鋒首相を迎える一連の行事があった。会見は二日間、四時間に及んで中東問題、ソ連問題、韓国問題等について意見を交換し、また、石油開発や円借款など二国間の問題についていくつかの合意を見た。

二回にわたる首脳会談の数多い成果は、二十九日の午後、共同新聞発表の形で取りまとめられ、発表されたが、両首脳が、それぞれの立場の違いを認め合いながら、両国の協調関係を着実なものとするを一層くつきりと浮き立たせるとともに、日中関係が地についた『実務的關係』に入ったことが示された。

また、その頃には、大平首相が期待を寄せていた政策研究グループの報告書が、順次、提出されつつあった。十九日には、環太平洋構想研究グループの報告書が飯田経夫名古屋大学教授から渡された。飯田教授は、これを受け取った大平首相が、「ただひとつの善政になるかな」とつぶやくように言ったのに、瞬間ドキッとした」と記している。(『回想録』追想編)二十九日には、家庭基盤充実研究グループの報告書が提出され、家庭を大切にという同報告書の提言の趣旨にふさわしく、同研究グループのメンバーとなごやかな家族同伴のパーティーが官邸で催され、首相も志げ子夫人を伴って団樂のひとつときを過ぎた。このパーティーの席上、たまたま翌日から始まる選挙戦の街頭演説のことが話題になったが、大平首相は例の幾分はにこんだ表情で「皆さんは絶対に私の街頭演説の姿など見に来ないでくださいよ。とても皆さんに見せられるようなものではないから」と述べて爆笑をさそった。大平首相を囲む小さな人の渦が、ゆっくりと会場を移動しながら、話題は人物論、人生論から読書論、家庭論へと広がり、再三の秘書官の催促にもかかわらず、首相はいつまでもその場を立ち去り難い風情であった。この日本の家庭基盤の充実をめざす研究会の会合が、大平首相が官邸で出席した最後

の会合となった。そのパーティーの直前の僅かの時間に、大平首相は、真鍋賢二参議院議員から持ち込まれた地元小豆島の災害復旧記念碑のための揮毫に気軽に応じた。明日からは選挙戦に入るので、暇がないと思つたのだらう。秘書官室の栗本和子、大塚和子らに仕度させ、「やすらぎの塔」と書き上げた。これが大平首相の最後の筆となった。

大平首相は、華国鋒首相の答礼宴に出席するため、夕日が傾ぎ、涼しさの戻つた官邸を、再び帰ることなく、あとにした。選挙戦に入る日の前夜、午後六時二十四分であつた。